

## 第137回 三方限古典塾（'18, 3, 15）

### 呂 新吾（1536～1618）「呻吟語」（その10）

- 1 大事、難事には担当を看る。逆境、順境には襟度を看る。喜に臨み、怒に臨みては涵養を看る。群行、群止には識見を看る。（修身）

（意識） 大きな事件や困難な事件にぶつかったときに、どの程度にそれを担えるかが分かる。逆境や順境に臨んでは、どの程度の度量を養っているかが分かる。心が喜びや怒りに震えるときには、どの程度の修養を積んできたかが分かる。大ぜいの人と一緒に行動しているときには、どの程度の識見をもっているかが分かる。

（余説） どんなときに何が試されるのか、四つについて指摘されています。これは、人を観察するだけでなく、自分が修養すべき指針について考えるよい機会です。

東日本大震災・福島原発事故という空前の大事・難事に遭遇した某総理の行動が、いろいろと話題になりました。逆境ではすぐにへこたれ、順境になるといい気持ちになるなどと心が揺れ動くのは、心のレベルが低い証です。喜びそうな場面なのに恬淡としており、怒りそうな場面に悠揚としているなどというのは、平生によほど深く修養していないとできません。感情が爆発すると、冷静さを欠き判断を誤りがちになります。集団で行動しているとき、大勢順応や集団心理に流されず、立ち止まるべきなら敢えて立ち止まり、進むべきなら敢えて進むという、截然たる識見が試されます。

- 2 清明もまた十分ならんことを要す。ただ須く蔵めて渾厚の裏に在りて作用すべし。古今、禍を得るは清明なる人、十にその九に居る。未だ渾厚にして禍を得る者はあらず。今の人は、ただ清明の至らざらんことを恐る。乃ち愚と為す所以なり。（修身）

（意識） 考え方や仕事上での能力は、十分に磨いておかなければならない。ただし、それは内に秘めておいて、ゆったりどっしりと構えている必要がある。

昔から禍を蒙ったのは、十人のうち九人までが優れた才能を持った人物だった。ゆったりどっしりとした人物で、禍を蒙った者は未だに一人もいないのである。

ところが、近頃の人を見ていると、ただ能力が鈍ることだけを気にしている。これこそ愚か者という以外の何者でもない。

（余説） 世の中には「あいつはやり手だ」と評される、優れた能力を有する人物がいます。それは厳しい現実にある現代においては有力な武器です。どうしてそれを「内に秘めておけ」なのでしょう。鋭い切れ味の刃物は折れるのも早く、弱点も併せ持っています。また、切れすぎる人物は周囲から警戒されやすく、人の怨みを買うことにもなります。

呂新吾という人は、高級官僚でもあった人です。優れた才能ゆえに、足の引っ張り合いに会い、自滅していった人々を見てきて、このように感じたのではないのでしょうか。

もしくは、それは呂新吾自身の話だったかも知れません。

（参考） 老子上篇9「持してこれを盈たすは、其の已むるに如かず。揣えてこれを鋭くするは、長く保つべからず。金玉堂に満つるは、これを能く守る莫し。富貴にして驕るは、自ら其の咎を遺す。功遂げて身退くは、天の道なり」  
後漢書「盈満の咎」（満ち足りている時は災いが生じやすい）驕り高ぶりを戒める

3 心は常に操らんことを要し、身は常に勞せんことを要す。心は愈々操すれば愈々清明に、身は愈々勞すれば愈々強健なり。ただ自ずから過ぐるべからざるのみ。（修身）

（意識） 頭は常に使っていないなくてはならない。体も常に動かしていないなくてはならない。頭は使えば使うほど明晰になるし、体も動かせば動かすほど強健になる。ただし、度を越さないようにだけは気をつけなければならない。

（余説） このことは誰もがよく分かってはいることですが、足りぬなく、過ぎるなくというバランスを保つことは意外と難しいのが現実です。論語には「足らざるは過ぎたるに優れり」という教訓も事の本質を教えています。さらに、何かにのめりこんでしまって、場合によっては思わず大怪我をする恐れもあり、要注意です。

（参考） 論語・陽貨 19「子曰く、飽食終日、心を用うる所無くば、難いかな。博奕なる者有らざるか。之を為すは、猶已むに賢れり」

（老先生の教え、腹一杯食べて、一日中何もしないでごろごろしているようでは、まともな人間になるのは難しいな。双六だの囲碁だのという遊びがあるではないか。それでもしているほうが、何もしないでいるよりはまだましだろう。）

4 己、才なくして能に譲らず、甚だしきは、則ち之を害す。己、惡を為して人の善を為すを惡み、甚だしきは之を誣う。己、貧賤にして人の富貴を惡み、甚だしきは則ち之を傾く。この三妬は、人の大戮なり。（人情）

（意識） 自分に才能がないのに、それでいて才能のある人に譲らず、ひどいものになると、その能力のある人を陥れ、危害を加える。また自分が悪いことをしておりながら、人が善行をなすのを憎み、ひどいものになると事実でないことを、あるように言い立てて罪に陥れる。自分が貧しく賤しい境遇にあるからといって他人の富貴を憎み、ひどいものになるとその富貴を傾けようとする。この能力・行為・状況に対する嫉妬というものは、人が受ける罪の中で最も重い刑に値するものである。

（余説） いずれも痛いほど現実の世の中にみられる問題です。それだけに考えさせられ、反省させられ、救われるような気がします。これが呻吟語のもつ妙味でしょうか。

カトリック教会に、七つの大罪と言われる「高慢・食欲・嫉妬・憤怒・色欲・貪食・怠惰」があり、嫉妬は三番目です。まことに人間とは「罪深き存在」です。

（参考） 『ブッダの真理の言葉 感興の言葉』 中村元訳（岩波書店）

ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によってつくり出される  
もしも汚れた心で話したり行ったりするならば、苦しみはその人につき従う  
車を引く牛の足跡に車輪がついて行くように

ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によってつくり出される  
もしも清らかな心で話したり行ったりするならば、福樂はその人につき従う  
影がそのからだからはなれないように

「彼は我を罵った、彼は我を害した、彼は我に打ち勝った、彼は我から強奪した  
という思いを抱く人には、恨みは已むことはない

（以下略）